

26. 澱粉工場の思い出

村尾有市

※明治24年9月10日生、愛媛県出身。

私は、大正7年3月25日、愛媛県から直接上藻8号に入地した。そのころ8号沢で開拓に当たっていた人は、西条某、横関治平、秋山宗一、近藤軍之助、近藤岩太郎、近藤求太郎、近藤時光、佐々木光太、岩掘某、鈴木半平、追田喜三郎、菅野三之助、角力山豊治、石山武恵等で、8号沢には、15戸入殖していた。

当時の畑作は、雑穀が非常に値段が良かったが、私は手が足りず、えん豆を作っては畑で腐らし、ハッカを作っては草だらけという始末で、辛い開拓時代を過ぎた。

上藻の澱粉工場の創始者は、七重に居た小林弥三郎さんで、次いで山本利作だと言われており、大正5年ころだった。

私が入殖してから、澱粉の賃ずりは、田淵工場（幸大）では、澱粉1袋に原料薯9俵、岡島工場（要八）では10俵ということだった。こんな状況だったから、澱粉工場は有利だと思っていた。

私の畑作は手が足りず思わしくないの、澱粉工場でもやろうかと思案していたときに、市街の浅川末吉さんに勧められた。そして土別の渡辺という雑穀商を紹介してもらった。浅川さんは、斉藤さんと共同で澱粉工場をやっていて、傍ら雑穀仲買いをしており、渡辺さんとの取引がある縁故からだった。

この渡辺さんに資金を出してもらい、ロールは、土別の西条政吉鉄工場から買入れた。

しかし融通してもらった資金では足らず、無一文から始めた仕事だけに、工場の屋根も思うように葺けず、他の人たちに、タル木や小舞が腐って終うと悪口まで言われたりして、あちこち金策の末、漸く出来上った。

初めてのことで、賃ずりも薯8俵とし、畑まで取りに行くことにしたので、評判は良かった。

しかしそのころ上藻では、澱粉工場が続出し、近くでも、近藤軍之助、浮田秀尾さん等も、私と同じ頃に工場を始めたので、薯の集荷が思うようにならず、工場も小さく、塩見、近藤（求太郎）さんと私の3戸分の原料薯だけで、初年度では、僅か174袋しか生産できなかった。これは昭和6年であった。

これでは商売にならず、思い切って工場の拡張をやった。当時村内だけでも同業者は34軒もあって、原料薯の集荷も容易でなく、過当競争の中に、私も入り込んだ訳だった。

戦時中になって、昭和13年ころと思うが、澱粉価格が大きく値下りをし、12匁匁1袋3円40銭までになり、仕事をすればする程赤字になった。

私の工場も赤字で、1,500円の借金ができて支払えず、自殺するかとまで苦しんだのもこのころだ。

これではどうにもならんと言うことで、国に働き掛けて、価格統制をしてもらうことに、村内業者の主だった者が相談した。

当時管内出身の東条貞代議士は、私と同県人で顔見知りだったので、この人に価格統制について協力を願った。

このころ東条代議士は、通信参与宮になったが、宮中出仕の大礼服も作れない程貧乏していたので、関係者で大礼服構入の醸金をしたことがある。

このときに、100匁袋に澱粉を入れて、中央に送り、政府関係者に宣伝したが、私は良いところを選んで、六匁匁ほど送ったことがある。

西興部の澱粉は、水質が良いので、他町村よりずっと良質の澱粉が出来、有名だった。

野島村長時代の昭和17年に、村内澱粉工場は、かつて36工場あったのが、28に減少していたが、資材、労力等が厳しい統制になったので、これを更に16工場に、企業合同することになった。

これは、三カ年の生産実績を基礎にして行ったもので、私の近くでは、藤田、浮田、鈴木の3工場を閉鎖して、いままでの3工場の集荷区域の原料薯は、私の工場に入るようになった。この3工場への生産譲渡権利金は、藤田さんに600円、浮田、鈴木さんには各300円を支払ったが、とに角、この時も金がなくて、四苦八苦したものだ。

この前の年あたりに、全道の未粉澱粉工業組合ができて、理事長に名寄の太田鉄太郎さん、副理事長に村の齊藤健二郎さんがなり、また村の組合もできて、組合長に齊藤さん、副に私が推されたが、とに角戦前、戦中の西興部の澱粉は有名だった。

東条代議士から澱粉価格統制の状況を、手紙で次のように知らせてきた。

拝啓先般御来示の澱粉価格統制は、いよいよ近く実施されることと相成可申候

御了承相成度お知らせ申上候

12月19日 (昭和14年)

東 条 貞

村尾賢堂侍史

大礼服調整費用沢山寄贈ありがとう。

諸君によろしく

昭和10年ころまでの、金融機関は、紋別の拓銀よりなく、借入れの連帯保証人は10人で、後に5人になったが、誠に不便だったし、こうした苦しい借金をしての工場経営は、大してうまい儲けにはならないで終わったのだ。